

「贖罪的な苦しみと死」

2014年10月13日

『南京大虐殺否定論 13 のウソ』は1999年に南京調査委員会が編集して出版された。

「はじめに」に「現在の日本には、いやなことはなかったことにしたいのか、南京大虐殺など存在しなかったという議論がある」と書いている。そして、南京大虐殺を否定する13の主張に対し、7名の方々が否定論のウソを丁寧論破している。南京大虐殺は「東京裁判」で国民が知ることになったが、事實は、当初から見聞きした人々によって、世界に発信されていた。本多勝一氏の『中国の旅』を読んで、日本軍の中国での蛮行に衝撃を受けた。南京大虐殺については、多くの証言があり、累々と横たわる死者の写真もある。虐殺された人数に関しては色々な説があるが、なかったとは断じて言えない事実である。

「従軍慰安婦」問題が取りざたされている。朝日新聞は吉田清治氏の証言をスクープとして報道した。ところが、吉田証言は虚偽であったと、報道の誤りを認めた。あるメディアやジャーナリズムは鬼の首を取ったかのように、朝日新聞をバッシングして、廃刊まで追い込もうとしている。戦前のような論調である。「従軍慰安婦」の存在は吉田証言がなくても、事実であったことは、彼女たちの血のにじむ証言、その他諸々の証拠から明らかである。これらをなかったかのように主張するのは、なぜであろうか。

安倍首相は「戦後レジームから脱却」と言う。南京大虐殺や従軍慰安婦を認めることを「自虐史観」と言い「東京裁判」を否定したいようだ。勝者による東京裁判は公正に欠ける裁判であった点はあるが、国際的に認められ、日本も承諾したものであった。問題は、他国によって裁かれたが、国民による戦争責任の追及をしなかったことである。ドイツは自らが、戦争責任を時効のない犯罪として追及している。この姿勢が世界から評価と信頼を得ている。自分の過ちを認めることは苦しいことであるが、そこから新しい地平が広がってくる。歴史の事実を都合よく歪曲することは、自分の心を荒廃させていく。

南京大虐殺や従軍慰安婦はなかったとすることは、屈辱的な苦しみと無残な死を受けた人々を貶めることである。世の中で起こる理不尽な苦しみと死は「贖罪的な意味」を持っていると私は思っている。人間が犯す罪を身に負い、苦しめられ殺されたと理解する時、彼らの存在が浮かびあがり、彼らと私たちの関係が責任をもって、関わり合ってくる。

主イエスの十字架の死は諸々の罪を背負わされている。エルサレム神殿当局は律法に違反する人物として死へと追い込んだ。ローマの総督ピラトは無罪を知りつつも死刑を執行した。民衆はローマ支配からの解放を期待したが、捕縛され、無力な主イエスを見捨て「十字架につけよ」と叫んだ。これらの思惑と声を一身に受けて、理不尽に殺された。これは、遠い昔の出来事ではなく、私も主イエスを十字架につけることに加担した者であることを知らされる。聖書は、この主イエスの死は「贖罪」であったと告げる。キリスト教信仰は「贖罪死」をとげたイエスをキリスト(救い主)と信じることである。この信仰に立つ時、南京で殺され、凌辱された人々、従軍慰安婦として人生を奪われた人々と主イエスの苦しみと死が重なって見えてくる。

「戦後レジーム」は押し付けられた面もあるが、少なくとも民主主義と平和を模索、構築してきたと言えよう。「脱却」というなら、米国追従からの脱却である。米国の戦争に加担し、殺す者と殺される者たちを再び出してはならない。それが、南京大虐殺や従軍慰安婦制度によって受けた苦しみと死に「贖罪的な意味」を認める者の責任である。